教育セミナー②

◆生成 AI を活用した学会発表支援とポケットエコーから始める臨床研究 ―日常の画像観察を学会発表につなげるために―

日本体育大学、日本体育大学医療専門学校　伊藤　　譲
宜野湾スポーツ接骨院、公益社団法人沖縄県柔道整復師会　今西　博昭

【key words】生成 AI、学会発表、運動器エコー、臨床研究、急性外傷

【Abstract】
「エコー画像は撮っているが、保存したままになっている」「学会発表に興味はあるが、何から始めればよいか分からない」。本講演は、そのような臨床家に向けた実践入門である。日常の外傷対応では、受傷機転、圧痛や荷重の状態、初回のエコー像、数日後の変化など、学会発表につながる情報がすでに得られている。本講演前半では、生成 AI（Generative Artificial Intelligence）を用いて臨床の疑問を整理し、テーマ設定、文献検索のための検索語の整理、抄録作成、スライド構成へつなげる手順を紹介する。併せて、生成 AI の出力には誤りがあり得ること、原典の確認、個人情報への配慮、研究倫理、最終的な著者責任が欠かせないことを解説する。後半では、ポケットエコーで何ができるのかを、柔道整復師が遭遇しやすい急性外傷を例に示す。携帯性を生かして、受傷部位の形態、健側との違い、動かしたときの挙動、経時変化を観察し、疼痛、圧痛、荷重、可動域、機能評価と組み合わせることで、固定や負荷の調整、施術継続の可否、競技復帰、必要時の医療機関との連携を考える材料にできる。一方で、「見えた」ことだけで判断せず、「見えない」ことを損傷なしと判断しない姿勢が重要である。画像はプローブ角度や圧、肢位、関節角度、装置設定によって変化し、画像所見の改善のみを根拠に施術終了や競技復帰の可否を判断することはできない。特別な研究設備や高度な統計から始める必要はない。まず一つの外傷を選び、同じ条件で「撮る・残す・比べる」。そこに生成 AI による「整理する・伝える」支援を加えることで、日常臨床の記録を症例報告や臨床研究の着想、学会発表へつなげることができる。本講演では、初心者が実践するための撮像上の注意点と最小限の記録項目を示す。